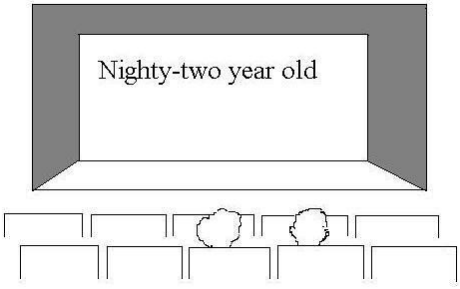
エッセイ「９２歳のパリジェンヌ」

根来　澪子

２０１６年１２月、大晦日を２，３日後にひかえた２７日、映画を見に行った。館内はがらがら、みな大忙しのこの時期にのんびりと映画を見られるのも、なにもすることのない高齢者の特権である。映画の題名は「９２歳のパリジェンヌ」。９１歳になる私のボーイフレンドに誘われたのだ。驚くことはない。私自身もうとっくに８０歳を過ぎている。超高齢者の私たちのデートは、胃にやさしい食事と、映画や、たまに文化会館で上演される音楽会を聞きに行く程度のことでおしゃべりが中心である。

足は衰え、ボーイフレンドＹは日帰りの旅行さえできないが、会話はある種個性的で現代の政治や世相にも精通しているし、教えられることも多い。しかし１０歳近い年下の私が抱くある種のボランティア精神でにこやかに話し相手に応じていることもたしかだ。私の存在が少しでも慰めになればということだ。Ｙは９０歳になって突然始めた俳句にのめりこんでいて、それがまた、なかなかに納得のいく句を作るのだ。俳句教室でも全くの初心者であるにもかかわらず、認められているらしい。会員同士、無記名で投句したのを互選するらしいが、何時もそれなりに入選しているという。

「９０の翁、８０の媼を口説きけり」との句はシルバー川柳にぴったりだし、私の大好きな薔薇に関した句に「模糊とした色は許さじ赤い薔薇」と詠んだときには感動した。芸術的な才能の開花は年齢に関係ないようである。Ｙとの会話に惹かれているところがあるとすればその豊かな感受性であろう。



そのYが、超高齢者にふさわしい映画のようだから是非一緒に見たいと誘ってくれたのだ。全く先入観はなかった。題名からして９０歳を過ぎてもおしゃれに過ごすパリジェンヌの日常を描いているのかと想像し、一緒に出掛けた。『人はいくつになっても、美しい』（幻冬舎）というタイトルで８８歳の、イギリスの現役モデル、ダフネ・セルフが書いたエッセイを読んだばかりで、「美しさは心に宿るもの、老いもふくめて、ありのままの自分を認めること」が一番美しいのだという内容だった。確かに写真でみるセルフは、顔の皺は多かったが、人工的に手当てしていないところに、品格があった。老いは必ずやってくる。現代は整形美容が普遍化していて一般の女性にも浸透していると聞くが、日本の芸能界で活躍している高齢女優達の、年齢不相応の人工的に形作った無表情な顔をみていると、自然に刻まれた皺さえもうつくしくおもえてくる。「９２歳のパリジェンヌ」はさぞ知性に磨かれた高齢者の美をまとっていることだろう。期待をして観にいった。しかし我々は暗澹たる気持ちで映画館を出ることになった。テーマが全く違っていて愕然としたのである。誘った彼にも意外な内容だったようだ。「誘って悪かったかなあ」としょげている。「そんなことはないよ、フランス映画をみたのは久しぶりだった、よかった」と答えた。

いつものように鍋焼きうどんをすすって、壁一面に泰西画などを飾り、コペンハーゲンの器でコーヒーを提供する一寸ムードのある喫茶店でおしゃべりをする。もちろん今見てきた映画についてだ。

パンフレットのキャッチフレーズを丸写しにすれば次のようだ。

――「いままで本当にありがとう。いい人生だった」。９２歳になったマドレーヌは家族が集まったバースディパーティの席で皆に語り掛ける。「２か月後の１０月１７日に私は逝きます」。娘夫婦と息子夫婦、その孫たちは言葉を失う。それから家族の波乱の日々が始まる。母を説得しようと会話を重ねるうちに娘は次第に母の生き方や強さに心を動かされていく。刻々と近づく「その日」を迎えるまでの親子が過ごした日々のドラマである。

２００２年１２月６日、リオネル・ジョスパン仏元首相の母ミレイユが、自ら人生を終える日をきめ、それを実行。この９２歳のパリジェンヌの決断がフ

ランス社会に大きな波紋を投げかけた。その２年後、彼女の娘であり、作家でもあるノエル・シャトレが母の決断と別れをつづった『最期の教え』（青土社）を出版。美しい死を選ぶという生き方とそれを支える娘の心情に多くの人が心を動かされた。以来、殺到する映画化のオファをすべて断っていたが、１１年後に再びオファがあったとき、時が来た、とその申し出を快諾。ついに映画化が実現した。」――。１１年後、すなわち２０１３年に制作された映画である。

老齢になって他人の手を借りなければ生きていけないと知ったとき、自分では出来ないことが次第に増えていくとき、９２歳の母は自らの命を絶ったのだ。作家である娘、ノエル・シャトレから、また息子であるフランス元首相リオネル・ジョスパンからみた母、その孫たちから見た祖母の姿は克明に描かれていて、自らの命の期限を明言した時のそれぞれの反応は、当然のことながら、驚きと戸惑いと怒りで動揺した。特に息子ジョスパンは「母は老人性鬱にかかっているのだ、治療をすれば気分が明るくなるだろう」と強制的に医者を勧め、老人ホームを探す。

「病院で管に繋がれて死ぬのはいや」と彼女は決然と拒否し、医療を受けない選択をする。助産婦として、また女性の権利のため活躍してきた母であっただけに家族もそれぞれの葛藤をへて次第に納得していく。母の意志を受け入れてからの親子の交流は美しい。母と娘は笑顔を絶やさない。一種二人の共犯関係が、つかの間の「生」を生き生きとさせる。「最期」が決断されたことによって日々が一層輝くのだ。母は強い女であると同時に、豊かな女性としての生き方も持っていた。長年にわたって手紙を交換しているボーイフレンドがいたのだ。自分の生に区切りをつける彼女は、娘の運転する車で彼の元を訪ねる。穏やかに人生の年輪を重ねた二人に会話はほとんどない。テラスでコーヒーを一緒に飲む。ただお互いに見つめあうだけ。その場面の、緑の木々に風がそよぎ、無言の二人が交わす微笑の映像はすばらしい。

やがて「その日」がやってきた。子供たちの家族が集まり、母からの電話を待つ。「今まで本当にありがとう」。家族に感謝をし、オートミールに混ぜた睡眠薬を口に運んでいく。

映画のキャストの名前は実在の人物と異なっているし、監督、脚本を手掛けたパスカル・プザドウも「原作を自由に脚色し、架空の家族の物語にした」と言っている。一家族の問題ではなく、私自身を含めて間近にひかえている人生の終末期の在り方を描いているこの映画の原作をぜひ読みたいと思い、図書館で借りて読んだ。

原作のノエル・シャトレによる『最期の教え』（青土社）は、母が自分の最後を家族に通告した時からその時を迎えるまでの心境を、娘であるシャトレが母に語り掛けるという形式で綴った文章であり、映画はほぼ原作に忠実であることがわかった。母が助産婦として活躍してきた様々なエピソード、そして高齢による制御できない疲れと、肉体的な衰えを実感したとき、自らの人生を終わらせたいという心情を理解するに至るまでの娘の動揺と葛藤の軌跡。人生が充実し、輝いていたほど老いによる無力感は激しいだろう。彼女が真摯に死と向き合えたのは人生を謳歌してきたからだと思う。母に対する愛情が隅々にまであふれていて読んでいて切ないが文章はとても詩的である。「あなたは疲れていた、疑いようもなく――あなたがこの家に戻ってこないことを認め、その確かさを私も共有してしまうに十分なほどの疲労だった――娘はよく理解しているつもりであったが「その日」が近づくにつれ、恐怖と焦燥にとらわれる。足元に身を投げ出し膝に頭を載せ、腕で抱きしめ愛を口にする。「泣かないで」と母はいった。

「最期の日」に母のそばに立ち会うわけにはいかなかった。自殺ほう助罪になるからだ。家族は別の家に集まって、母からの最期の電話を待った。母は静かだった。「用意はできているのよ、これからシャワーを浴びます」「ママ、愛している」「私もお前を愛しています」

娘は話し続ける。「私は何よりもあなたを崇拝しているのよ」きっとあなたは微笑さえ浮かべたことでしょう。という言葉でこの作品は終わっている。

死をまえにして本人がつづった文章ではない。死を決断した本人がどのようにして死を受容したかを書かれたものではない。あくまでも娘の視点からみた母の最期の姿なのでインパクトはうすい。できれば本人が記録に残してほしかった。いまや超高齢者社会にあって真剣に考えなければならない課題

だとおもう。人生の終焉についてすでに様々な本が出版され、作家や評論家、宗教家などによって語られていることは、真剣に考える年代がやってきたということだ。たとえ体の自由がきかず、意識は朦朧として寝た切りになったとしても、「生」にはそれだけの価値があり、神が与えた命は神がお召しになるまで全うしなくてはという考えは宗教的人道的な見地から常識であろう。少数の国を除いて安楽死は認められていない。日本もしかり。フランスは自殺を禁じるカトリックの国である。これは２００２年に実際にあった事件でフランスではかなり話題になったらしいが映画を見るまではまったく知らなかった。が、この衝撃的な事件をもってしても「命」を人工的に扱うことは法律的にも人道的にも受容されなかった。

「人間の命は地球より重い」のだ。当事者の意思であっても自死は忌むべきものだろう。しかしこれからの何十年か、きれいごとでは済まされない時代が来るような気がする。健康志向のテレビ番組はあふれ、寿命は延びるばかり、やがて百七歳まで生きるのではというデータもあるという。現役で働いている期間と同じぐらいの年代を老後として過ごすことになる。そのあいだの年代で、趣味だけで過ごすには長すぎるし、大きな「生きる意義」（目的）が必要なのではと思う。１００歳以上の老人は激増していると言われるがほとんどは寝たきりが多いというのも実態のようである。体の機能は衰え、それでも内臓は刻々と動き続け、ある人は認知症で「無」の世界で生きることになるだろう。個人差もあるだろうが、それでも生かせたいと思う人が周囲にいれば当然生きる権利がある。しかし安楽死、尊厳死に関しては本人の意思が最も重要であり、ある程度の高齢になったら自分の終焉のありかたをきめてそれが受け入れられる時代であってほしいと痛感する。

超高齢化時代のいま、９０歳になっても活躍している人もめずらしくないのも現実だ。その年代の人たちの著書も数多くある。私が思いつくだけでも瀬戸内寂聴はもちろん、佐藤愛子の『９０歳何がめでたい』（小学館）がかなり話題になった。画家の篠田桃江は１０３歳である。もう亡くなったが柴田とよの『いじけないで』というエッセイも話題作でその後『百歳』という詩集も出版した。身近では秦野

市の秦野病院院長高橋幸枝の『こころの匙加減』（飛島新社）がある。これも百歳で出版した。「心の匙加減」ほど難しいものはなく、生きていくことはこの匙加減を見極めることだという。１００歳にして到達した心境なのだろう。女性第一号の報道写真家の笹本恒子は１０２歳になった昨年、テレビのトーク番組に出演していたが、しぐさが優雅でとても美しくコーディネートも万全で私もかくありたいと思った。朝日新聞の日曜版にエッセイを連載している１０５歳の日野原重明は破格である。もちろんその他市井のなかにも元気な高齢者は多いことだろう。高齢者というだけで物事を断定してはいけないと思う。人それぞれなのだ。

しかしわが身を顧みるとき、８０歳の半ばにも達していないのに時折はげしい疲労感に襲われる。朝、起きたばかりなのに、もう疲れているのだ。ソファにどっと倒れこむ。予定のある日はまだいいが、何もない日はこのまま寝込んでしまいたい心境だ。すでに今、そうなのだから９０歳になったら、と想像しただけでトンネルの闇にひきこまれそうだ。

わが９１歳のボーイフレンドはどうだろうと観察する。身長１７６センチの、枯れ木のような長身をもてあますようにゆらゆらと歩いているが猫背でもなく、ジーンズのジャケットなどを着こなしてこの年齢ではダンディである。

彼は一年ほど前に、数十年ともに暮らした妻を突然病気で失い、一時は孤独で狂わんばかりだったという。しかし今は一人暮らしではあるが、日々の生活は近隣の市に住む子供たちや、ヘルパーさんに助けられ、妻が逝ってから一か月もしないうちに市内で行われているサークルを調べ、とにかく興味のもてそうな会に参加し、行動した。９０歳という年齢にコンプレックスはなかったのかと思うが、その辺はあまりデリケートでないようだ。一年もしないうちに俳句のサークルに溶け込んで、思わぬ秀作を発表している。いまや作句が生きがいになっているようで歳時記をひもといては日々勉強に励んでいる。元来がネアカなのだろう。９１歳にして新たな果実が実ったのだ。ネガティーブな話題は好まない。安楽死や尊厳死など話題にしたくないのだ。彼は死の間際まで前向きであろう。だから「９２歳のパリジェンヌ」を観てかなりショックのようでしばらく無言だった。

山梨に伝わるという伝説に基づいて書かれたという『楢山節考』（深沢七郎）が発表された１９５６年代、やはり無用になった高齢者の在り方が問題になったが、世界にも姥捨てのような事例はあるという。若者が騒乱で命を落としたり、他国に拉致されたりして命を落とすのは絶対に避けなければならないし、命はかけがえのないものであるが、超高齢者が「もうこれで十分に生きた」となったとき、医者は罪に問われることなく希望をかなえてほしいと思う。以前、東海大の医師が患者を安楽死させたとして有罪になったことがあった。私は心底医師に同情する。苦しくさえなければ私は医者の過誤によって死を迎えてもいいとさえ思っている。自宅で家族に囲まれて逝きたいと多くの人は希望するが、私は病院のベッドで、有能な医者や看護師に看取ってもらいたいと思う。家族がいても何の意味もないし、なによりも苦痛は苦手だ。取り除いてくれる頼りがいのある人が傍にいてほしい。

１９６５年、精神科医のキュブラ・ロスの書いた『死ぬ瞬間』（読売新聞社）は、末期患者２００人に面談し、死にゆく人の心理を分析し、死を受容するに至る過程を５段階にわけて発表したものであり、また評論家立花隆は『臨死体験』（文芸春秋）のなかで、仮死状態から生還した人々をインタビューして死を迎える瞬間の心理を記録した。光り輝く全知全能の存在に出会ったり、お花畑のような、安らかな風景の中にいる自分を経験するという。死は眠るように生の隣にあるのだと、現在の老境でしみじみと痛感する。夫が逝った１９９４年、友人がプレゼントしてくれた本で、救いを求めるような気持ちで熟読した本だが、いまは書棚にない。

「我が人生に悔いはない」とは裕次郎の人生最後の歌である。私も十分に生きた。孤独だったが自由であった。悔いはない。ただ、もう一度人生をやり直せるのなら、こうしたいという夢想はあるが。

オランダは２００１年、世界に先駆けて安楽死を法制化した。９０年代にはすでに一定の条件を満たしていれば罪にならないという土壌ができていた。１９９７年、オランダ在住のネーダーコールン靖子（日本人女性）はアムステルダムの自宅で、甲状腺がんが全身に転移して不治であることを知り、５２人の夫との出会い、発病、死を選択し、その直前ま

その『うつくしいままで』（祥伝社）はオランダ

でを日記に書きのこしたものである。筆者が決して安易に死を選んだのではなく、苦痛によって自分を見失うことなく、尊厳をもって最後を迎えたいという強い意志で受け入れたものであることを、さわやかに伝えている。「あと１０分で逝きます。ほんとうにありがとう」という言葉をのこして。当時の朝日新聞の歌壇に次の短歌が掲載された。

何を流してほしいかと息子の我に聞く
音楽のことらし　わが葬送の

（以上のエッセイを書き終わってから一週間ほどして市の図書館に出かけた。文芸月刊雑誌を読むためだ。

文芸春秋三月特別号に「安楽死は是か非か」という特集が組んであった。脚本家の橋田寿賀子が昨年十二月号に「私は安楽死で逝きたい」という文章をよせ、話題になったらしい。橋田寿賀子と、長野諏訪病院院長の鎌田実の対談が乗っていて、そのほか６０人の著名人の安楽死、尊厳死についてのアンケートも掲載されていた。ほとんどが賛成であった。また娘を安楽死させた母の手記も乗っていた。娘がガンに侵されてその痛みに耐えられず、安楽死をするのを目の当たりにする母の苦痛はすさまじいものだろう。願わくばその苦痛だけは味わいたくない。人間は年齢順に逝くのがいい）

わがボーイフレンドと私は夕暮れの街にでた。年末なのに、商店街は意外にひっそりとしていた。クリスマスから新年に続いて飾られるイルミネーションが華やかに街を彩っている。若かったころの思い出が詰まっている光の饗宴だ。ちょっと感傷にひたる。「もう今年は終わりね、あと2，3日で年が改まるのね、一年の経つのは早いなー」と平凡な感想をのべる。「昔は年が明けると一つ年齢がふえたけど、今はいいねえ、誕生日がくるまで関係ないんだ、このままずーっと年を取らずにいたいけどね」とのんきなことを言いながら駅まで行く道の、通りすがりの本屋に立ち寄り、来年の日記手帳を買う。彼は3年日記。大丈夫かなあ。「毎回3年ごとに買っているんだ、今年も同じだよ」。3年たてばオリンピックの年、私もそうしようかと思ったけれどやはり例年通り一年にしておいた。

（２０１７年３月）